

## 「子ども英語実践」における附属幼稚園との連携と地域貢献

永倉 由里

要旨：本稿は、常葉大学短期大学部英語英文科における子ども英語指導に関する教育実践について報告するものである。特に同科の専門教育科目「子ども英語実践 A」及び「子ども英語実践 B」における学園内の幼稚園・小学校との連携と静岡市西奈生涯学習センター等での地域貢献について、その実践概要を述べる。併せて、これらの実践経験で得られた知見が、新学習指導要領に基づく今後の授業実践ならびに近隣の小中学校との研修・研究協力体制の構築、地域への貢献につながることを確認するものである。

キーワード：子ども英語，小学校英語指導者資格，連携教育，地域貢献，人格形成

### Cooperation with the Attached Kindergartens and Contribution to the Neighboring Areas in Education for Children's English

#### 1. はじめに

本稿は、常葉大学短期大学部英語英文科における「子ども英語」関連の実践報告である。まず、英語英文科が平成12年に菊川キャンパスより静岡へ移転した時点からの「子ども英語」への取り組みと、認定団体となったことで多くの学生がその取得に至った「小学校英語指導者資格」について述べる。同資格の条件である50時間以上の子ども英語教育実践を積み重ねるため、学園内外の小学校・幼稚園、静岡市西奈生涯学習センター、県内の英会話学校、近隣の町内会・子ども会等との間で展開した協力・連携についても言及する。

後半では、これらを通じて得た知見が、本格実施を控えた新学習指導要領を踏まえた授業実践ならびに近隣の小中学校との研修・研究の協力体制の構築、地域への貢献につながることを確認し、今後の具体的な活動への第一歩とする。

#### 2. 英語英文科における「子ども英語」教育

短期大学部英語英文科は、平成12年に菊川キャンパスから静岡へ移転する際「幼稚園教諭二種免許状」の取得を可能にし、子どもに英語を教えるノウハウを学ぶ「幼児英語コース」を設置した。保育科の専門科目を修め、子ども英語指導のスキルを身につけた卒業生の中には県内外の英語に力を入れている幼稚園で活躍する者もいる。当時としては、新しい領域だけに、教員にとっては専門分野を超えた新たな知識と教授法が求められることになったが、「生き残り」を懸けて柔軟にかつ果敢に教育内容の充実に取り組んだ。

この頃、次章で述べる「小学校英語指導者」に一定の指導力を保証する資格が生まれた。

### 3. 小学校英語指導者資格

「小学校英語指導者資格」とは、2003年に設立されたNPO法人小学校英語指導者認定協議会(略称: J-SHINE)が認定する資格で、日本における「小学校での英語教育の普及・発展を支援する」ことを目的としている。同協議会(以下 J-SHINE)は、全国の大学・専門学校、英会話学校などの認定団体と協力し、指導者養成に尽力している。

短期大学部は平成22年に J-SHINE の審査に合格し認定団体となった。それ以来、毎年数名から十数名の英語英文科学生が同資格を取得している(表1参照)。幼稚園教諭免許状と併せて取得する者が多く、実際に子どもと接する「子ども英語実践」では、子どもの発達・成長や心理についての学びと生来の“子ども好き”な気質がプラスに作用している。いわゆる教員免許ではなく卒業後の進路を約束するものではないが、英語に力を入れている幼稚園や子ども英語教室への就職につながっている。中には中学校英語教諭二種免許状と併せて取得し、静岡県教員採用試験に合格し県東部の公立中学校に奉職した者もいる。

表1 年度ごとの小学校英語指導者資格取得者数

平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
10人	9人	10人	4人	6人	15人	11人	10人(見込)

本学短期大学部で同資格を取得する条件は、ネイティブ教員が担当する必修科目「Oral A・B・C・D」(主に日常英会話力の育成)、ネイティブ教員が得意分野を活かして英語圏の文化を紹介しながら対話につなげる「Culture Studies A・B・C・D」(必修科目)、「異文化コミュニケーションAまたはB」(国際理解教育関連)、子ども英語指導に必要なスキルを基礎から応用へと積み重ねていく「子ども英語A・B」「早期英語教育事情A・B」をすべて修得し、さらに50時間以上の実習を行わなければならない。

J-SHINEが求める条件を満たすようカリキュラムを整え、理論と指導方法についての講義を開講し「準資格」の申請条件を満たす大学、専門・各種学校、民間語学学校は珍しくないが、「本資格」取得の条件である50時間にも及ぶ実習の機会を提供し、同資格取得希望者全員が「本資格」を取得し卒業の日を迎えている例は極めて少ない。しかも、民間語学学校等では「準資格」のみの取得に数十万円を要すると聞く。一方、短期大学部においては、申請時の手続き費用と実習先への交通費を除き学生への負担はない。

平成32年度の新学指導要領の本格実施、目の前に迫る平成30年度からの先行実施には、良質な指導者の供給が欠かせないが、その確保は全国の教育委員会、教育センター、小学校にとって最も頭の痛い問題となっている。実際、本学の周辺地域からも「日本人補助員」「元中学英語教諭」「J-SHINE資格保持者」の活用を検討しているとの話が聞かれる。

### 4. 子ども英語関連科目の内容と特徴

子ども英語指導法に関連する科目の内容と特徴を概観する。1年時には「子ども英語A・B」において、主に英語活動を行うための基本的な指導技術を学ぶ。座学だけでなく、これまでの先輩たちの活動記録映像を見たり、実際に短大部保育科附属のとは・たちばな両幼稚園で2年生の実習のサポートを体験したりする。また、先進的な英語教育を実践している常葉大学教育学部附属たちばな小学校の授業も見学させていただいている。

2年生になると、実際の英語活動の指導案を作成し、その実践を想定した演習型の「早

期英語教育事情 A・B」で実践力を高めている。次章で述べる通り、これまでにこちらの協力依頼に応え、見学・実習の機会を提供して下さっている学園内外の幼稚園・小学校、民間語学学校、静岡市の生涯学習センターが、学修の成果を試す場となっており、「子ども英語実践 A・B」の単位取得の条件ともなっている。

## 5. 「子ども英語実践 A・B」～学園内連携と地域貢献～

わずか2年間で、短期大学生としての学を修め、学生によっては中学教諭英語二種免許状や幼稚園教諭免許状、英語検定、TOEIC、実践キャリア実務士などの資格を目指し、長きにわたる就職活動と併行して、本資格取得の条件である50時間の実習を行い切るとは決して容易な事ではない。協力をいただいている主な実習先を以下に示す(表2)。

表2 「子ども英語実践 A・B」の主な見学・実習先

	見学・実習先	内容
1	短期大学附属とこは幼稚園	園庭開放日, ハロウィン, クリスマス [年間 2~3 回]
2	短期大学附属たちばな幼稚園	虫歯予防デー, ハロウィン, クリスマス他 [年間 3~6 回]
3	教育学部附属橘小学校	授業見学 [年間 1 回]
4	西奈生涯学習センター	静岡市との共催事業「あそぼうあそぼう ABC」 [年間 6 回]
5	マリア国際幼稚園	イマージョン教育での保育を見学 [年間 1 回]
6	素和美小学校	イマージョン教育の小学校授業を見学 [年間 1 回]
7	メガ・ブルーバード英語教室	ショッピング・モール内ある教室で個々に実習 [随時]
8	西千代田町子ども会	虫歯予防デー, ハロウィン, クリスマス他 [年間 3~4 回, ]
9	瀬名勘南久町内会	クリスマス [年間 1 回]
10	ドクター・キッド英語教室	藤枝市と共催のハロウィン・パレード [年間 1 回]

### 5.1 とこは幼稚園

静岡市葵区竜南に位置するとこは幼稚園では、土曜日の午前中に設定されている「園庭開放日」などに訪問し、季節の行事等に合わせて、「虫歯予防デー」「ハロウィン」「クリスマス」などのテーマに沿って、親子で楽しめる英語活動を行っている。日頃からネイティブ講師による英語活動の時間があることから、比較的積極的な幼児が多く、特に歌やチャンツに乗せストーリーを展開させるパネル・シアターには目を輝かせる。保護者やご家族の他、翌年度の入園を検討している親御さんたちも参加しており、同園に好印象を持っていただくことにつながっていると期待する。



図1 とこは幼稚園にて

### 5.2 たちばな幼稚園

は短期大学部から徒歩5分のたちばな幼稚園には頻りに訪問している。75名程の園児を講堂に集めて行うこともあれば、各教室の約25名に対し学生2~3名がそれぞれ工夫した活動を展開させることもある。

年中さん(5歳児クラス)は、まだ周囲を気にすることはなく、学生たちの示す絵カード、

ジェスチャーに注目し、特にストーリー性のあるパネル・シアターには興味を持ち、前のめりになって集中する。

一方、年長さん(6歳児クラス)は、徐々に周囲を気にするようになり、個としての反応をダイレクトに返すことが激減する。周りの“空気を読む”のである。すると、学生が満面の笑顔で語りかけたとしても、期待していた大きな声と明るい表情が返ってくるとは限らない。一端、この日本人社会で良く見られる独特の雰囲気は漂うと、妙な「間」が生まれ英語活動本来の楽しさも損なわれてしまうことになる。



図2 たちばな幼稚園にて

天候や寒暖などによっても、その日の園児の様子は個々様々であるが、そのあたりは、担任の先生の絶妙なサポートで大いに助けられている。クラスの園児に目を配り、調子に乗りすぎている子どもをたしなめたり、ぐずっている子を膝に置いたりしながら、園児の発話・行動に対して共感を示したり、褒め言葉をはさんでくれたりする。

周りの“空気を読む”ようになると中央に立った学生一人が全体の前で指示を出すようないわゆる「一対多」の指導はうまく機能しないことも多い。そこで、園児3~4人の小グループに対し、学生一人が付き、アイコンタクトを保ちながら“手取り足取り”の指導を行う場面を多くし、子どもたちが「わかったこと」「できたこと(発音できた、ジェスチャーができたなど)」をきちんと受け止め、笑顔で褒めたたえるようにした。

就学前の幼児であっても、こうした日本人らしさが頻繁に見て取れたことは、筆者にとっても、学生たちにとっても、「日本人らしさ」と「学びと成長」の関係を考える上で貴重な経験となった。学びと遊びの境界線のない幼稚園で観察・実習の機会を得られたからこそ、良い学びが起こっている時とそうでない時の園児の表れを直接受け止め、学びには様々な要因が影響することにあらためて気づかされた。

外国語活動・外国語教育が目指す「コミュニケーション能力の育成」を図りながら、次期学習指導要領で強調されている「主体的な学び」へと児童・生徒をいざなうためには、こうした集団としての日本人の特徴にどう配慮し、どう対処するかは極めて重要である。

### 5.3 生涯学習センターでの共催事業 ～あそぼうあそぼうABC～

7月から12月の第3木曜日の夕方、通称「リンク西奈」において、6回シリーズの英語講座「あそぼうあそぼうABC」を実施している。対象は小学1,2年生で、多数の応募者から抽選で20名が選ばれており、人気のある講座の一つとなっている。短期大学部の名前を背負っての活動となるため、活動内容の検討→具体的な指導案の作成・検討→音声教材の選択ならびにオリジナルの教材・教具の作成→パート練習→通し練習などと、かなりの時間を費やして当日を迎える。

日頃は異なる小学校で学ぶ20名の子どもたちが萎縮することなく英語活動を楽しめるようにと、学生なりに様々な点に配慮している。開始時刻の15分前あたりからパラパラと会場に入ってくる子どもたちに駆け寄り、名前を聞き、ネームタグを首に掛けながら、ちょっとしたおしゃべりで気分を和ませる。英語活動のテーマは、季節に合わせて設定させているため、関連の音楽や歌をBGMとして流し雰囲気作りも忘れない。もちろん、ハ

ロウインやクリスマスには、飾り付けにも工夫を凝らす。

同事業は、英語指導スキルの向上のみならず人格形成にも大きく貢献するプロジェクト学習である。当初は緊張した面持ちで会場に足を踏み入れる子どもたちを相手に、思い描いたようには実践できない苛立ちや想定外の子どもたちの反応を経験しながらも、回を追うごとに総合的スキルを高めていく様子は感動を覚える。

## 6. 実習経験と人格形成

前述の通り、学びには様々な要因が影響する。ここでは、良い学びが起こる条件として、頭と心と身体の状態に注目してみたい。専門外の領域ではあるが、心理学、脳科学等の分野の知見には注目すべきものが多い。

まず、よく知られているマズローの欲求階層説 (Maslow, 1970) を引用したい。マズローは、人間の欲求は5段階のピラミッドのように構成されていて、低次の基本的な欲求が満たされてはじめて上位の欲求が芽生えていくものとしている。基本的欲求を低次から列記すると以下の通りである(表3)。

表3 マズローの基本的欲求

1	生理的欲求(Physiological needs)	生きていくための基本的・本能的な欲求(食欲, 睡眠欲など)
2	安全欲求(Safety needs)	安全・安定・安心・秩序を求める欲求
3	社会的欲求, 愛の欲求(Social needs / Love and belonging)	集団への帰属や愛情を求める欲求
4	尊厳欲求(Esteem)	他者から認められたい, 尊敬されたいという欲求
5	自己実現欲求(Self-actualization)	自分を高めたい, 成長を追求したいという欲求

基本的な三つの欲求(生理的欲求, 安全の欲求, 社会的欲求)を学生の立場で考えてみると、良好な体調で出席し、安心できる雰囲気と自分の居場所のある空間で学びたいということであろう。これらが満たされてはじめて、友人などから価値ある存在だと認められたい、更には様々なことに挑戦したいといった上位の欲求(尊厳欲求, 自己実現欲求)を生まれてくる。

英語英文科には、個々の教員としても、教職員集団としても、学生一人ひとりを大切に、前向きな気持ちが醸成される独特の雰囲気がある。これはまさにマズローの言う「基本的な三欲求」を満たしているからに他ならない。入学当初の1年生と比較し、2年生の表情の柔らかさ、意欲・行動力には目を見張るものがある。

次に、アメリカの National Training Laboratories の調査に基づく「学習ピラミッド(Learning Pyramid)」をご覧ください(図3)。「講義」を聞いただけの知識は、ほとんど記憶に残らず(5%)、教員が「教えたことは学生が理解するはず」といった独りよがりな思い込みは「プロフェッサー症候群」と称される。一方、「グループ・ディスカッション」「実践してみる」「他者に教える」

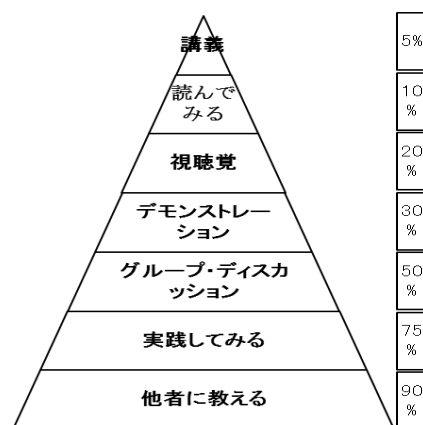


図3 学習ピラミッド

者に教える」などの能動的行動による知識は記憶に残りやすいことが明らかになっている。

また、アメリカの高等教育の権威ボイヤー(1988)は「すべての真の学習は、受動的ではなく能動的な性格を持つ。そこでは単なる記憶力ではなく精神(mind)の働きがなければならず、学習とは発見の過程であり、そこでは教師ではなく学生が主役だ」と述べている。

いわゆる“体験型”“研修型”の授業のみならず、必修科目として設定した外国人教員が担当する少人数制の会話中心の授業についても学生の能動的学習を強く促していることに注目していただきたい。永倉(2009)では授業評価の高い外国人教員の会話中心の科目についてその高い授業評価の理由を探った。その結果、日本人担当科目では得てして受動的になりがちなのに対し、少人数でのオール・イングリッシュの授業では、適度な緊張と集中を強いられ、頭と心のスイッチが‘On’の状態となっており、それゆえに、聞き取れた英語の量の如何に関わらず、喜びと満足を得ていることが浮き彫りになった。

“体験型”“研修型”の科目の多くは普段とは異なる学外環境で行われる。それゆえの期待感、緊張感も高まり、結果として能動的な態度で臨むことになる。心と頭のスイッチが‘On’の状態で行動することから、自ずと「楽しさ」や「満足感」が増す。

「興味関心」や「楽しさ」だけでなく、特に研修型の科目は「学友と共に参加し、ある体験を享受する」ことにより「有能感」に準ずるものが得られ、学生同士の「関係性」にも良い影響を与える。

次に脳科学者の知見を紹介したい。茂木(2009)は「意欲」を持つか否かは“精神論”ではなく、人間にのみ備わった「意欲」とは丸暗記のような創造性の乏しい活動によって高まることは難しく「未知なるもの」と遭遇する時「既に自分の中にあるもの」を認識し直す時、共同作業などにより達成感を共有した時などに無意識のうちに高まるとしている。授業を通じて茂木が「アハ体験」と呼ぶ感情システムの活性化が起こると脳はそれを快感とみなし、再びその快感を得るために同様の行動を繰り返すよう志向する。そして、脳が喜ぶような経験を積み重ねればいくつになっても脳の機能を高めることができるとしている。

同様に脳科学者 Damasio (2000) も、知性を磨くためには無意識のうちに湧き起こる“emotion”が重要な役割を果たしているとし、この“emotion”の段階を経なければ「言語を使用する学習」は成り立たないとしている。すなわち、我々の学習行動は“emotion”に裏づけされた時に最も効果を発揮するということになる。

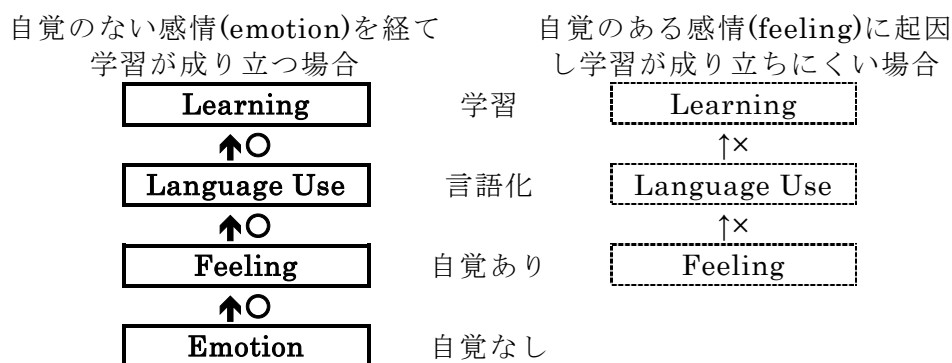


図4 学習の成立に必要な自覚のない感情(emotion)

両氏の議論により、EFLにある日本人英語学習にとって、教室での学習体験によって茂木の言う「無意識の感情」、Damasioの言う“emotion”を経て興味関心を持つに至り、意味のあるコミュニケーションを楽しめるか否かが鍵を握っていることが確認できる。

Damasioの研究を筆者なりに簡単な図にしてみた(図4)。

この図は、前述の「試験が近いから」という自覚に基づく“feeling”は、“emotion”を伴わない「建前の動機づけ」に終わってしまう危険性もあることを示唆している。つまり、学習者が教室での活動の中で“emotion”の段階を経た上で自身のやる気を自覚(“feel”)すれば、言語化がなされ、学習が成立するというのである。

## 7. まとめと今後の教育活動ならびに研究活動への抱負

筆者にとって、中学校教員養成に関わるのと並行して、学生とともに各所へ赴き子ども英語指導実践を重ねた経験は、小学校英語指導にも大いに役立っている。

指導内容や指導スキルはもちろんのこと、この間に作成した教材・教具は大きな財産である。何より意義深いのは、英語活動中の子どもたちの姿を直接観察できたことである。

英語活動により興味関心を喚起され、頭と心と身体のスイッチが‘On’の状態となり、喜々として活動に参加している時の明るい表情、積極的な態度は、指導する者にも大きな喜びを与える。一方、不安げな表情を浮かべ、声も小さく動きも緩慢であったりすると、その場の雰囲気を変換できず、自らの指導力不足に落胆したりする。

英語教育だけでなく、新学習指導要領全体を貫く「3つの柱(「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」)の育成を目指し、妥当な評価を行っていく際には「頭と心と身体のスイッチが‘On’」か否かを見取ることが極めて重要となる。

### 7.1 新学習指導要領の解釈に活かす

新学習指導要領では、「外国語活動」及び「外国語」を含む全ての教科等の目標と内容において、前述の3つの柱が貫かれている。ここで、教師に求められるのはいかにして児童・生徒の頭と心と身体を‘On’の状態に保たせ、良い学びが起こるよう、仕掛け、仕向け、受け止めるかである。

長きにわたり、高等学校、[短期]大学等で教鞭を執ってきたが、学びに向かう意欲や関心、学習スタイルの違いは、なかなか塗り替えられるものではなく、以前は性格や理解度によるものだと思い込んでいた節もあったかと思う。

しかし、幼児や児童と関わり、英語活動中に見せる様々な表情、行動等を受け止めるうちに、教師とは‘On’の状態での学びを引き出すコーディネーターであることを気づかされた。興味・関心が喚起され、On’の状態で遊びや学びを経験すれば、理解が進み、技能が身につくという根本的な学びのメカニズムに気づくことができたのは大きな収穫である。こうした視座に立ち、新学習指導要領が求めるところを解釈し、教員志望の学生への指導においても、「主体的な態度」によってのみ「学び」が起こることを肝に銘じて教育・研究活動に取り組んでいきたいものである。

## 7.2 小中高連携に活かす

新学習指導要領の下では、「外国語活動」の早期化、「外国語」の教科化により、我が国の外国語教育の枠組みが大きく変更される。それに伴い、中学校以降の英語教育も大きく変わることになる。

そこで、注目しなければならないのは、前述の3つの柱は、中高等学校でも、全ての教科等の目標と内容において、明記されており、「On」の状態での学び、「主体的な態度」によってのみ起こる「良い学び」、「真の学び」が起こる教育を目指していることである。

外国語教育については、大学入試の出題傾向の影響も根強く、暗記中心の学びに終始してきたことによる弊害として、「使えない」「話せない」「応用が利かない」といった悪評は枚挙にいとまがない。集団主義的な日本人の特性との絡みもあるが、「On」の状態での学び、「主体的な態度」を小中高と継続することにより、目標の達成への具体策を考えたい。

## 7.3 教授法指導ならびに教員研修に活かす

幼小中高大の英語活動・英語学習において、貫かれるべきは「主体的な態度」すなわち「On」の状態での学びを追求することである。それは、英語活動の中心を成すコミュニケーション活動における「真正さ」「リアルさ」と密接に関係している。新学習指導要領で用いられている表現で言えば、段階的に「意味のあるやり取り」が成り立つところまで導くということであり、そのプロセスにおける教師によるコーディネート力が求められる。具体的には、現職教員の方々との繋がりを構築し、共同して研修・研究を行う姿勢を示していきたい。

筆者は、1998年より中高等学校の英語教員ならびに英語教師を目指す学生を対象に20年間以上「英語授業向上のための研修会」を開催してきた。数年前からは小学校における英語指導にも焦点を当て、ワークショップ形式で実践的な教授法を共有している。例年40～80名の学生・教員が集うが、本学を卒業した現職教員が数多く参加している。

今後は、小中高の垣根を越え、情報交換、交流、指導内容・指導方法・教材等における小中高大連携を意識した研究会・研修会の運営方法を検討していきたい。こうした出会いの中から、大学院でさらに学ぼうとする者、学会等での実践報告などに関心を示す者を掘り起こし、「成長する教師」であり続けることを奨励できればと思う。

## 7.4 地域貢献に活かす

前述の通り、様々な場所において、様々な年齢の子どもたちと英語を通じた活動を行ってきた。ある時は、保護者の方々や、子ども会の世話の方々とも意見交換をさせていただいた。地域とつながることの意義を痛感し、活動の幅を広げたいとも考える。

## 8. おわりに

短期大学部英語英文科は平成31年3月を持ってその歴史を閉じることになるが、「子ども英語指導」で得た学びを今後の教育活動、研究活動等に活かすことを約束する。

## 参考文献

アーネスト・L・ボイヤー(1988).『アメリカの大学カレッジ』東京:リクルート出版 p.174



Damasio, A. (2000). *The feeling of what happens*. New York: Mariner Books.

Maslow, A. H. (1970a). *Motivation and Personality*. New York: Harper & Row.

茂木健一郎 (2009) 『感動する脳』 東京：PHP 文庫

永倉由里 (2009) 「常葉学園短期大学英語英文科生の実情と改善の方向性」 『常葉学園短期大学  
紀要』 第 40 号 1-20 頁